



Company Profile

日本の
土台を
新しく。



日本の 土台を 新しく。

その道が出来たとき、私たちの仕事は見えなくなる。

私たちは地面の下で、道の安心を支えている。

その山を見つめたとき、きっとどこかに私たちがいる。

災害から人々を守る、確かな仕事の足跡がある。

この国に確かな安心を届けるために。

どこまでも続く活力を届けるために。

私たちは、日本の土台をつくる。守り続ける。新しくする。

日本の隅々で現場を見つめ、

誰よりも資材の可能性を信じ、今日まで築いて来た技術と、

他の誰もが持ち得ない新しい発想で。

私たちは信じ続ける。

私たち一人ひとりの創造力が、チームの力が、

この国の国土の未来をつくることを。

日本のインフラの未来を支える プロデューサー集団に

超高齢化社会に対応したコンパクトシティ、IoT・モビリティの進化によるスマートシティ。これからのまちづくりは、まちを確かに支えるインフラの進化を求めています。さらに私たちの国土は構築後50年以上経過し、老朽化したインフラの再構築も緊急の課題です。

こうした時代の中、岡三リビックは何をしている会社か?と問われれば、私は「日本の土台のプロデューサー」だと答えます。私たちは、現場を自分の目で見てユーザーのニーズを把握し、必要な商品を提供するだけでなく、共同開発・用途開発も行なっている企業です。インフラの仕事は一社では解決できない複雑な仕事だから、建設現場の需要側(工事)と資材の供給側(メーカー)をつなぎ、プロデュースするという、建設業界の中でもユニークな私たちの存在はますます重要になると考えます。私たちはインフラに求められる課題が多様化・複雑化する今、社員一人ひとりの現場を見る力、市場を創り出す力、商品の価値化を図る力を始めとしたプロデュース力の向上を常に図っていきます。

そして岡三リビックはどんな会社か?と問われれば、私は「あたたかなプロ集団だ」と答えます。社員が現場にこだわるプロフェッショナルであると同時に、組織の中で家族のような一体感と強さを持つために、早くから社員持ち株制度を導入しました。創業以来50年、私たちは一人ひとりの社員が高い経営意識を持ちながら共に支え合い、成長を共に分かち合う企業像を理想に掲げながら、インフラの構築に貢献してきました。

これからも社会を支えるインフラは、新しい高度なテクノロジーやデジタル技術を取り入れながら、変化を続けることでしょう。その時大切なことは、そのインフラを支える仕事はこれからの人の暮らし、社会のあり方を先取りしていくことなのだと思います。現場を誰よりも知るプロフェッショナルとして、岡三リビックの社員だからこそその柔軟な発想とチャレンジ精神で、私たちはしなやかに創造的な答えを見つけていきます。

「日本の土台を新しく。」するために、豊かな創造性を持ったプロデューサー集団であり続けること。次の50年への私たちの誓いです。

代表取締役社長

小川 勝利





A 東名高速道路応急復旧工事
(牧之原地区)

2009年8月11日に発生した駿河湾を震源とする地震により、東名高速道路牧之原SA近くの盛土のり面が崩壊し通行止めとなりました。お盆のラッシュの最中、日本の大動脈が断絶という重大事。翌日の夜中からの突貫工事に向けて短期間で大量のEDO-EPSを手配し納入、施工現場では徹夜で対応しました。4日後の15日の夜中には無事復旧、当社の対応力とスピードを実証しました。



B 九十九里有料道路津波対策工事

2011年の東日本大震災を教訓とし、その被害を繰り返さないために各地で津波対策が検討されました。千葉県九十九里海岸の約10kmに及ぶ嵩上げ道路工事では、使用する盛土材の条件が多種に渡るため、盛土材への適用範囲が広い当社の多数アンカーが採用されました。当社の技術・製品が、国内でも最大級の防災減災・国土強靱化に有効であると証明された事例です。



E 自然と共存する、土木景観工事

土木景観事業で培ったノウハウは、動物園・水族館など様々な展示工事でも活かされています。高度経済成長期に全国各地に建設された建築物や土木構造物は、老朽化による建て替えや維持補修の負荷が避けられなくなっています。当社は造るだけでなく、自然に戻す時のことまで考慮した提案と施工を実施。展示工事は「しなやかで美しい土木」の象徴の一つです。



Projects | 実績紹介

常に新しい取り組みで 国土の未来を創る岡三リビック



C 熊本325号災害復旧阿蘇大橋上下部工事

今も人々の記憶に深く残る、熊本地震。大規模斜面崩壊によって分断された325号の復旧工事に、創業当初から当社が取扱うライナープレートが採用されました。傾斜地の橋脚基礎工事では大型重機での杭施工が困難な中、大口径深礎工として橋脚を安定して支えるライナープレートが最適な工法と選定され、斜面崩壊での橋梁建設に大きく貢献しました。



D 八高線橋梁護岸新設工事

JR東日本の八高線橋梁護岸新設工事で、河川の切り廻しを目的にコルゲートパイプが採用されました。仮設横断管としては類を見ないスケールでしたが、限られた工期内で完成させなければならない課題に、コルゲートパイプ及びEPS施工を専門とするグループ会社「岡三工事」と共に、販売・施工一体で現場の高いレベルの要望に応えました。当社グループの総合力により実現した事例です。



F 三方原用水二期農業水利事業

浜名湖北部の広大な土地の田畑を支える三方原水路は完成より50年以上が経ち、老朽化が農業用水の安定供給に甚大な障害を及ぼすおそれがありました。この地域は一年中、田畑で作物を生産しており、長期間水の供給を止められません。この課題を解決したのが「ARISライナー工法」。既設管の内部に新たに管を形成して通常より短期間での改修を実現、地域農業の安定に貢献しました。



G 常磐線新駅設置工事

常磐線の新駅設置工事で、当社が販売、岡三工事が下請として軽量盛土「EDO-EPS工法」を施工。トンネル口からV字状につながる215mのホームの高上げ、駅舎と結ぶ長いスロープの造成に単位体積重量が土砂と比較して1/100の発泡スチロールを用い、重機を使わず人力による迅速な施工を実現しました。

1971 岡三興業株式会社設立

1980

1999 岡三リビック株式会社に社名変更

2000

2010

2021 50周年

Identity 02 **社員一人ひとりの自分の会社
“Our Company”**

社員一人ひとりの力を信じ、任せる。誰もが経営者になれる可能性を持ちながら、「自分の会社」として活躍できるのが岡三リビック。



Identity 03 **人がやらない
やり方をしよう**

コルゲートパイプ、ライナープレート、多数アンカー等で国内有数の供給量を長年にわたって誇れるのは、何事につけ「人とは違うやり方」を創意工夫してきたからこそ。常識を超えてもやる、人がやらなくてもやるのが岡三リビック。



Identity 05 **現場力・提案力・技術力・ネットワークの
掛け算が生む「岡三流革新力」**

取り扱い商品の飛躍的拡大は、培ってきた現場を大事にする姿勢、創意工夫の提案力、技術力、内外の知恵とネットワークの掛け算の賜物。これが岡三リビック独自の事業革新力。



Identity 06 **際立つ個性が活躍する
オール岡三スピリット**

職種、性別、国籍、人の個性の多様性、組織としての柔軟性を大事にする。多様な人材がまとまって、オール岡三の力が発揮される。



Identity 07 **次の50年に向けて
「日本の土台を新しく」**

これまでの50年以上の大きな変化が待ち受けるこれからの50年。更なる事業の柔軟な革新、社会貢献力の強化で、日本のインフラを、日本の土台を新しくしていく想いを実現していく。



次の
50年
へ

Identity 01 **反骨精神が
すべての原点**

創業者である岡村雄次は「反骨の人」。それまでの常識にとらわれない、大企業にも盲従しない。とにかく自ら考え、行動し、周囲を巻き込みながら世界を創っていく。岡三リビックの原点がここにある。



Identity 04 **時代を先読みして
柔軟に自らを変える**

時代や社会の変化に対応すべく、世界中から新しい技術や素材を採り入れる、自らも商社、メーカー、研究・技術開発企業、と様々な顔を持ち、柔軟に変化していく。固定観念や過去の成功体験に囚われない企業であり続ける。



01



Challenge to 防災・減災



近年、局地的な大雨等が頻発していることから、雨水による幹線道路の交通への支障や床上浸水による被災など、甚大な被害が発生しています。また造成などの開発行為を行う際には、敷地内に調整池を設置することが義務付けられています。当社はプラスチック製雨水貯留浸透槽「ジオプール工法」で土地の有効活用と雨水の貯留・浸透対策に対応しています。

03



Challenge to 農業・農村の持続的発展



我が国の食と活力ある農業・農村の未来に、その持続的な発展は欠かせません。当社はARISライナー工法を用い、美しい田畑を開削することなく守りながら、老朽化した既存のパイプラインを更生し、改築する工法を開発しました。調査から設計・施工まで一貫した技術で、未来の農業生産基盤整備に貢献しています。

未来に向けて、
岡三リビックのさらなるチャレンジ

Challenge to the future

Challenge to インフラの未来



日本のインフラ老朽化が話題となる中、次世代により良い形で引き継ぐためにインフラ施設を維持管理する技術が重要となっています。当社では補強土壁の維持管理技術高度化のために超音波探傷法やリフトオフ試験などを駆使して土中にある補強材を診断、インフラの健全性を維持する技術開発を進めています。

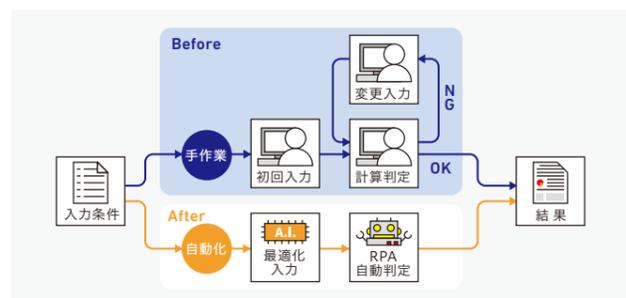
04



02



Challenge to 設計業務の簡略化



未曾有の災害が頻発する状況では、複雑かつ緊急の案件に対応できる提案力が必要です。AIによる最適化入力とRPAによる自動計算を掛け合わせた設計の合理化を推進。当社の経験と実績データをベースとした試算を繰り返し、最善かつ最適な工法を提案。計画から調査、設計、施工、維持管理、更新に至る過程においてICTを駆使して各情報を一元化、生産性の向上やトータルコストの縮減の実現を目指します。

05



Challenge to アジアのインフラ整備



2011年にアジアのインフラ整備貢献への第一歩としてベトナムホーチミン市に駐在員事務所開設。経済発展の途上にある国では都市機能としてのインフラ整備、防災のインフラ整備も発展途上。対策を施さなければならないものが無数にあります。安全で、安心な国造りのお手伝いを、当社グループの力を結集して行います。

